

「小中一貫教育」の事例に学ぶ

藤島地域教育振興会議（近藤直志委員長）の第2回会合が17日、藤島地区地域活動センターで開かれ、小中一貫教育の事例研修が行われました。

酒田市の小中一貫

事例研修1は、「酒田市の小中一貫教育の取り組みについて」、市教育委員会学校教育課長補佐の齋藤正光氏が講演しました。

酒田市は令和2年度から「小中一貫教育」をスタートさせていますが、既存の中学校区単位で、一貫校の取り組みはありません。小・中9年間を見通した系統性・一貫性のある教育課程を編成・実践しています。

新庄市立萩野学園

事例研修2は、「新庄市立萩野学園の取組みについて」、同学園校長の鈴木英樹氏が講演しました。

新庄市萩野地域は31地区1221世帯の農村地域で、泉田小・萩野小・昭和小と、萩野中学校が2015（平成27）年統合し、施設一体型小中一貫教育校

「萩野学園」として開校、翌年4月に義務教育学校としました。

令和4年度の生徒数は、小学校230人、中学校124人、計354人で、この10年間で1000人減少しています。

小中ギャップない

9年間で4・3・2の3期に分け、前期は1〜4年生、中期は5〜7年生、後期は8、9年生です。

生徒会は8年生が主体で、9年生はアドバタイザーの位置づけ。前期4年生と後期7年生もリーダーの位置づけで、小6から7年生へのスムーズな接続で、小中ギャップはないとのこと。

学校経営の重要課題は、「心の安定」がすべての基本（土台）で、「自学力向上にむけた9年間」の系統的な教育を実践しています。

児童生徒の成果は、子どもの目標が9年生で、9年間で4回のリーダーを経験し、後期課程で生徒の心は安定し、問題行動や不登校が減少している。

5年生から教科担任制を入れ、教科と担任の先生の、複数の目で

の見守りがある。

教職員の成果は、各小・中の学校文化の垣根を解消し、資質の向上や広い視野の育成につながっている。

保護者にとって、校則や指導方針などの小・中の違いがなくなり、継続した指導で、安心感が生まれている。

課題として、広域となり学校と保護者の距離が広がり、行事が精選され、学校とのつながりが薄くなったなどを上げています。

小6から中1へのリセット場面がなくなり、中1ギャップ解消の副反応がある。特別な支援が必要な児童生徒数が多く（要検査を含め1年生26%、6年生56%）、検査が進まないことなども課題にあげています。

高1ギャップ

小中一貫校は、小学6年生を終えても卒業式がなく、中学入学式もないが、その影響はないか、

9年間の「心の安定」で、中一の成長の飛躍が生まれず、今度は、高校入学で「高1ギャップ」を乗り越えられないか、という課題はないか、話はありませんでした。

村の四季

23

鈴木重雄（八色木）

ミソハギ（盆花）、アジサイ（紫陽花）

長く蒸し暑い梅雨も終わり、本格的な夏を迎える。

平成22年は気温も上がらず、寒い日が多く、天候の回復を願うのは農家ばかりではなかった。

この頃になると、稲の生育も回復し、田んぼの畦道には盆花（ミソハギ）が株になって伸び、茎に密集して赤紫の小花をつける。



お盆に仏壇やお墓に供えるために、草刈の時はこだけ残してお盆に備える。

また、屋根や畑の片隅にシマズスキを植えて、分蘗と一緒に飾る。



田んぼの稲も、排水と灌水を繰り返すことに、田んぼも固くなっていき、稲もぐんぐん伸びてくる。

7月の中頃は分施ぶんしの時期である。分施は秋の収穫に大

さく影響するので、鉄頭くかしは気を使う。

稲の立ち姿、稲葉の緑色の濃淡、これからの天気具合などを予測して、肥料の成分を決める。

農協の技術員は、各集落を回って指導にあたる忙しい毎日であった。

農家は病害虫の防除や草刈作業に追われる。いもち病にはセレサン石灰、ニカメイ虫にはEPN乳剤を散布していた。セレサン石灰の原体は水銀剤であり、EPN乳剤は有機リン剤なので、人体にも害があり使用禁止になった。

梅雨の時期は、庭にアジサイが咲き、ナンテンが白い花を咲かせるのもその頃。



私は普通のアジサイもきれいだと思うが、ガクアジサイの方が清楚で本当に美しさがあると思う。

露に濡れたアジサイは綺麗である。



自治体間の税収奪い合いの「ふるさと納税」

鶴岡市のふるさと納税の収入は、令和3年度14億6400万円でした。

一方、酒田市は34億6900万円、県内1位の寒河江市は39億4600万円でした。

鶴岡市は各方面から、「収入増にもっと知恵を出せ」と言われていますが、大きな疑問です。

ふるさと納税制度は、自治体間の税収奪い合いです。

本来、居住地に入るはずの住民税が、他市に移転する仕組みだからです。

返礼品に要する経費や、PR代に貴重な税金が費やされます。

片山善博氏は、「自治体がこぞつてよその税を奪うために知恵を絞っている姿は健全ではない。それは他人の金を奪うためにあれこれ知恵を絞っているオレオレ詐欺集団を彷彿とさせる。自治体はもつとまともなことに知恵を絞るべきではないか。」と言っています（『世界』12月号）。

例えばある自治体に10万円寄付した人は、住民税などの税が9万8千円減税される。

寄付先から概ね3割に相当する返礼品、3万円分が届けられる。

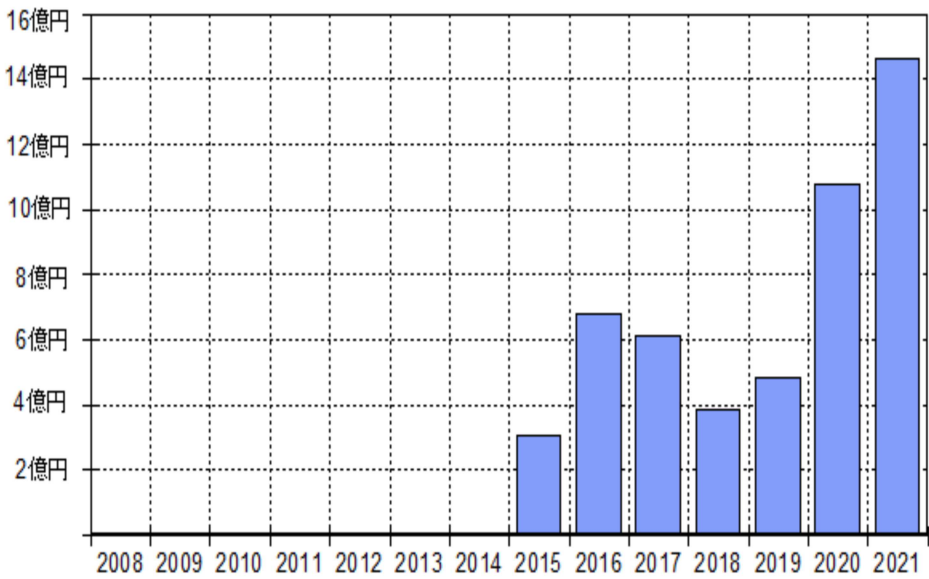
寄付者は3万円分のお気に入り商品を、わずか2千円で手に入れたことになる。

こんなダンピング政策がまかり通る社会は、異常です。（同上）

鶴岡市のふるさと納税額

年	ふるさと納税額
2021	14.64億円
2020	10.77億円
2019	4.84億円
2018	3.88億円
2017	6.12億円
2016	6.77億円
2015	3.05億円
2014	412万円
2013	213万円
2012	189万円
2011	125万円
2010	100.5万円
2009	102万円
2008	63.2万円

鶴岡市のふるさと納税額



ひと 村山俊太郎・ひで夫妻 青山 崇

戦時体制での綴方教育の取組み

教育の分野は、後に俊太郎の生涯にわたる、いわば教育史的なことを述べるので、ここではその一部だけを書くに留めたい。

「論文・事変下の綴方指導…1939年4月」で次のように書いています。

「時局綴方はあくまでも生活を描くことから時局がおのずから描きだされるのでなければ

のうえにかえすことが必要で、そこから再出発しなければならぬのではないかと思う。」

ポイントをいえば、子どもの日常生活のなかの真実性を失い、観念的な時局への感情が先だってしまう。例えば「忠孝一ちで 国旗けいよう」からだきよめて勅語ほうどくなどの類である。

子どもの生活の真実性がある具体例は。「カーキ色ふくがならんで／ぎつ／ぎつとすすむ／白い布まいたてつぼう／かづいで／鉄



薬を貰えない人も

社会保障制度を良くする鶴岡・田川の会（会長は協立社鶴岡生協の議長高橋憲志氏）には、鶴岡生協・医療生協やまがた・地域労連に年金者組合など多くの団体が入っているから、その団体にあなたが入っていればあなたもこの会員であるが。

▲この会は毎年、要請キャラバンと言って自治体と懇談会を持っているが、18日午前に鶴岡市・午後三川町（庄内町は12月23日）で行われた。俺は、午前年金者組合で参加した。

▲会長は挨拶で、社会保障は国が責任を負うべきところ（憲法55条）なのだが、そうならない所自治体や住民の苦勞がある・と話され、それを良くしていくために時間をとってくれた事に感謝して懇談は始まった。

かぶとが光っている／みちはひとで一ぱいだ／桑の木にあがつてばんざいとあった。」（3年）。

俊太郎の批評。

「題材のつかみ方がむだなく、焦点だけが、よくとらえられている。しかも、みる眼がたしかだ。最後の自分の行動をうつしているところで、この詩は生かされている。桑の木にあがつて出征する兵士を見送っている。こどもの感情が、この表現から迫ってくる。」

▲事前に国保・コロナ生活保護・年金など全般に質問を出し、回答を貰ったの話し合いである。だから、それぞれについて補充質問し、現場の実態を話して理解を共有する。

▲10月から高齢者は医療費が倍になったが、医者には掛つてもお金がなく薬を貰わない人が増えている事。電気・水道・携帯も止められ、何も食べていない人が相談に来られ、診察を受けたら直入院。市役所の担当から来てもらい、生活保護を決めてもらったが、一週間ほどで亡くなられた話など、現場の実態が・・

▲俺は年金者組合として発言。庄内町で始めを鶴岡でも早期にと求め、年金が減り医療費が倍になっている現実を、減らない年金にする為国に働き掛ける事を求めた処、共に快い返事を貰った。（石川）